

『 出る前に負けること考えるバカいるかよ! 』

先日、新日本プロレスリング創設者であるアントニオ猪木さんが亡くなりました。三井年次主任と約30年近くプロレスファンである私にとって、「ああ、昭和のプロレスが終わりましたね。」という出来事でした。最近では川崎先生にも様々なプロレス用語を叩き込んでいくところ。さて、冒頭(タイトル)のメッセージの後に、猪木さんはインタビューをピンタしています。「闘魂ピンタ」の始まりです。インタビュアーが「負けた場合」のことを訊ねたからです。この時の対戦相手は闘魂三銃士として名を馳せる蝶野正洋と橋本真也でした。橋本は橋本でこの試合前に「時はきた。それだけだ。」という迷言を残しています。11月となり、今年もあと60日程度で終わります。受験本番が近づいてきていますが、みなさんはどのような心境でしょうか？私は猪木さんは負けることを考えていなかったとは思いません。むしろ考えていたからこそ、最大限の努力をすることができたのだと思います。カウント2.9からの逆転勝ちがプロレスの醍醐味です。「負けたくない！」のならば、残された時間の中で「負けたくないためには何を、どのように、どれ位やればいいのか？」を自分自身で見極めなければなりません。



「この道を行けば どうなるものか。危ぶむなかれ 危ぶめば道はなし。

踏み出せば その一足が道となり、その一足が道となる。迷わず行けよ。行けばわかるさ。」

これは猪木さんが引退する時に述べた言葉です。清沢哲夫さんの詩だとか一休宗純の言葉だとか言われていますが元ネタははっきりしません。人生は決断の連続です。決断を他者に委ねてはいけません。「この勉強方法で大丈夫なのか?」、「この志望校でいいのだろうか?」、悩みは尽きませんが自分で決断した後は「迷わずやるだけ」です。情報があふれている現在において、何を取捨選択するのは君次第です。冷たいようですが、どんな結果になろうとも、誰のせいにもできません。しかし、自分が決断したことであれば、必ず結果を受け入れることができます。「落ちたら、またはいあがってくればいいだけのこと。」「道はどんなに険しくとも、笑いながら歩こうぜ!」。猪木さんの名言を繋げるだけで、私自身のメッセージがほとんどなくてすみませんでした。「元気があれば、何でもできる!」

3組担任 細倉 要太郎

『 いつもの風景 』

11月に入り、ますます日が短くなってきました。そんな夕暮れの教室に、私が西高に赴任した13年前と変わらない風景があります。それはそれぞれの教室で数人が勉強をしている姿です。窓の外には暗闇が広がり冷たい風が吹きすさんでも、教室の中は集中力で満たされています。その光景が国公立大学の後期試験の3月中旬まで続くというのが、西高の”いつもの風景”です。そしてそのメンバーをよく見ると、推薦等で合格内定している生徒も必ずいるのです。進路が決定していても勉強を続ける、それは友達を励ますためでもあり自分のためでもあると言っていた卒業生がいました。



大学進学後も社会に出てからも“学び続けること”これこそが西高生の強みだと言えます。

近々、先月毎週のように受けた模試の結果が届くと思います。それでなくても不安の真ただ中にある受験生がその結果に一喜一憂するのは当然です。しかし、結果は結果として受け止め(だって模試は本番ではないから、判定が良くなくても落胆するのではなく、また判定が良かったとしても油断することなく)淡々と自分の弱点を見つけ克服することに専念しましょう!

放課後の教室だけではなく、もちろん自宅や塾で頑張っている生徒も大勢いるでしょう。今はちょっと辛いなあと感じている人もいますが、この辛さも乗り切ってしまえば自信になります!“学び続ける”皆さんのこれからに大いに期待しています!

3組副担任 奥田久美子